



新  
版  
法  
入

嘆  
分  
久  
人  
集



遠 13  
1929  
4



嘆分五人總

四之卷



目錄



才一 浦島太郎の一事が中々感言の因分ち

心も今も昔も様々あるがその心を

仔細の端もいとおそろしくこれに感

方丈書庫裏眼花の巻の退の箱

五冊  
八冊  
四冊  
七冊

才二、 涙の雨は古き若狭の涼いなるが立物本

お切もある親よけをゆせぬ二筋じとめ

ゆきのみい師匠勤めは清き才子の裾

ゆき梅い娘が玉のおおけ子のま親子れら

才三、 頼母姿人の初ようい夢と忘れ茶

物ごい田舎人をわづげりいさし初の一徳

聲といふれて留を鼻にさくちりおま文

方便のふむ乃程眼でをいさ粹乃眼

① 浦の島の一はねやと威云と圓分寺

今新おわらうても片田舎をいづい推まきたるおまは

友と後ひて橋はよほふ、のがう溜泊とぬりつ、同ちそらぬ

陰よとまこのり報うつとぬうて、世界のけらんをよのぶと

よの夏に枝川を細新約して小船はづの新候ととりて

おまび、秋の月をそんく、石の羊と垣煮けで、まごられあら

年貢納りの債合のかい小舟ひらちりこのま、守教ド

から垣男、冬に圍炉裏よは生本をくく、尻れ黒い茶籠と

角玉のうけも、他りのお茶茶とのまておとよりか、けあさけ

まば、そのぼく、熱きう、はねちをあまび、あつて、あんなれ、ゆき

の濡う、一里づりして、圓分寺といふ、大さあり、を、まの、百



































